



数年前に広島県呉市の江田島を訪れたことがあります。江田島は旧海軍兵学校が東京の築地から移転した場所で、現在は海上自衛隊の教育施設が置かれています。この学校の敷地内には、勝海舟や坂本竜馬など歴史的な著名人の書画等を展示している資料館があり、以前から一度そこを見学したいと考えていたのです。文明開化と共に設立された海軍兵学校の卒業生の顔写真も保管されており、司馬遼太郎さんの小説『坂の上の雲』に登場する人物たちの、若かりし面影も見出すことが出来ました。この人たちがこの国の将来を心から憂い、頑張ってきてくれたことで、今日の日本が存続できているのか。その時に感じた感覚は、かつて上野の国立博物館で国宝展を鑑賞した際に感じたものと同じものだったと振り返ります。天井高の展示室の冷えた空気が相まって、背筋が伸びる気が致しました。

資料館を訪れるには、学校の敷地内を巡る見学ツアーに参加することになります。ツアーは参加者が 20-30 名毎にグループを作り、海上自衛隊を退官されたと思われる案内役の教官と幹部候補生 1 名が随行し、敷地内を 90 分ほど歩いて巡ります。一通りのツアーが終了しスタート地点に戻ると、教官の第一声は耳を疑う言葉でした。「怪我人はいませんか。皆、無事に戻れましたか」。驚きました。だって、ただの見学ツアーですよ。学校の敷地はかなり広く、しかも休日だったこともあり、人一人車一台見かけませんでした。要するにだっ広い平地を、青空の下にだらだらと歩いていただけなのです。たったそれだけのツアーで怪我人はいないかという言葉は、あまりにも場違いなのです。教官はこの言葉を強調するでもなく、当たり前のように話を続けられました。しかし私は、この予想もしなかった言葉に、合点がいったのです。そうか、そうだったんだ。脳裏の中に、かつての記憶がまざまざと蘇ってきました。

今から十年ほど前の新潟県中越地震の際、私は東京都の医療チームのメンバーとして被災地に入りました。そこで自衛隊の活躍を初めて目の当たりにしたのです。彼らはもくもくと作業をこなしていきます。個性などは一切表に出さず、ひたすら任務を遂行し、任務が完了すれば静かに去っていく、そんなイメージでした。顔が見えず個性がない、

いわば温もりが感じられない専門集団に映っていたのです。そのようなイメージが、今回の教官の言葉で完全に払拭されました。恐らく自衛隊内では、ひとつの行動が終了する度に、怪我人はいないかという熱い声掛けがあるのでしょう。考えてみれば当たり前のことです。しかし私には今回初めてそれが意識され、実感されたのです。世間からは任務の成果だけが問われる彼らですが、その裏では行動を共にした仲間の状態を心から気遣っていたのですね。この言葉には、彼らが私たちには決して見せることのない、人間の感情が読み取れます。部下を心配する想いと上官に対する信頼感とが共鳴し、グループの結束が固められているのです。そういえば、消防署のレスキュー隊を扱ったドキュメンタリー番組で、同じような強固な人間関係を垣間見たことがありました。自衛隊にしてもレスキュー隊にしても、このような人間関係があるからこそ、ひとつの目的に皆が結束することも出来るし、任務を完了することが出来るのだと思いました。ツアーの内容はとても興味深く、資料館の展示も充実したものでした。しかし私にとっては、教官のこの一言に接したことこそ、このツアーに参加した何よりの収穫だったと思っています。

組織に所属していると、自分の思い通りの仕事や役回りが回ってくることは滅多にありません。殆どは前向きになれないものばかりです。あるいは仕事の進め方についても、個人的な考えが頭をよぎり、つい文句や愚痴が口をついて出てしまうこともありますよね。自衛隊やレスキュー隊ではどうかといえば、彼らの任務は政治等の上から降りてきます。それに対して個人的な見解をはさむ余地はありません。しかも与えられた任務は、とにかく完了しなければならないのです。このように、突然降りてきた重要極まりない任務に即座に対応し、それを確実に遂行していくためには、適切な戦略や優れた理論だけでは無理がありましょう。人としての強固な結びつきが不可欠なのだと思います。私たちの活動の場は彼らとは異なりますが、しかし私たちも彼らから学ぶところが多々あるように思えます。いよいよ平成 28 年度がスタートしました。私たちも仲間の健康を互いに気遣い、先輩を尊敬し、周囲に配慮し、強固な結束を保ちながら、任務を粛々と進めていきたいですね。